

2004 年防災教育チャレンジプラン最終報告書

記入日 2004年 1月 25日

舞子高校のプランの一つが3年間の実践事例をまとめるという内容であるため、以下の報告書には記入しにくい箇所が多々あります。書ける範囲で書くことと、書きにくいところは求められた様式を若干変更して書くことをお許しください。そんな理由で少々ピンボケの回答もあります。

I 概要

実践団体・担当者名	兵庫県立舞子高等学校環境防災科（担当者：諏訪清二）	
連絡先	〒655-0004 神戸市垂水区学が丘3-2 TEL 078-783-5151	
プランタイトル	教科や総合的な学習の時間を使った防災教育実践事例集づくり	
目的	防災教育を広め、推進していくために、小・中・高等学校の教員が参考にできる「防災教育実践事例集」を作成する。防災教育の目的、内容、活動事例、評価などを記載し、説明や図表、写真を使ってわかりやすく解説する。また、阪神・淡路大震災の資料集として3年生39人の震災体験を冊子にする。予算で許される範囲でできるだけたくさん印刷し、教員研修会や各種ワークショップで配布する。防災教育にとりくみたいが何をしたいかわからないといった悩みに答え、だれもがとりくむことのできる防災教育の体系を作り上げたい。事例集の内容はHPでも紹介する。	
プランの概略	* 環境防災科の専門科目を使って、社会環境・自然環境の両方の視点から防災教育を実践する。具体的な活動は、外部講師の授業、校外学習、小学校との合同防災教育、まちづくり、国際交流、壁新聞作り、調べ学習など、さまざま。 * 学校行事を使って「震災メモリアル行事」を行う。 * 総合的な学習の時間（2年生）を年間を通して使い、防災教育を実施する。	
プランの対象と参加人数	環境防災科1年30人 2年39人 3年39人 普通科 2年280人 総合計390人程度	
実施日時	2004年4月から2005年3月まで 日常の授業を中心に実施し、学校行事などでもとりくむ。	
主な実施場所	兵庫県立舞子高等学校 人と防災未来センター 人と自然の博物館 神戸市消防学校 六甲山 兵庫県広域総合防災センター などさまざまな施設	
連携した団体名、 連携の方法	連携団体の有無	あり【ただし、外部講師、校外学習などの講師として連携しており、共同で教育内容を創造するといった連携ではない】
	連携した団体名	国際機関【UNCRD JICA ADRC】 NGO【CODE NSET-Nepal 被災地NGO協働センター など】 企業【関西電力 大阪ガス 阪急電鉄など】 博物館【人と防災未来センター 人と自然の博物館 野島断層保存館】 行政【神戸市 兵庫県】 学校【多聞東小学校 多聞東中学校など】 大学【神戸大学 大阪市立大学 京都大学など】 陸上自衛隊兵庫地本部 その他多数
	連携したきっかけ・理由	通常授業の外部講師としての招聘 体験学習・校外学習の場 1・17震災メモリアル行事の講師
	連携団体へのアプローチ方法	「出会い」を生かしてネットワークをつくり、依頼する。 あるいは、教育目的にあった団体を探して依頼する。
	連携団体との打合せ回数	それぞれのとりくみによって違う。
	連携団体との役割分担	舞子高校がコーディネート。各団体が外部講師の派遣、校外学習の受け入れ、共同学習を行う。

Ⅱ プラン立案過程

プラン立案メンバーの人数・役割	団体内のスタッフ総人数	約10人が環境防災科研究委員、約5人が総合学習推進委員として企画立案にあっている。ただし、授業内容は個々の教員に任されている。行事によっては全教職員が担当する。
	外部スタッフの総人数	外部講師は1回～数回の授業を受け持っていていただく。校外学習の受け入れは相手方のスタッフが当たる。「震災メモリアル行事」では1時間の講師を務めていただく。
	主なメンバーの役職・役割	各科目担当教員：授業内容の立案、実施 外部講師・校外学習などの企画、依頼、実施 行事担当教員：行事の企画、立案、依頼、実施 総合学習推進委員：分野の設定、授業ローテーションの作成、提案 総合学習担当教員：授業の企画、実施
プラン立案に要した日数・時間	立案期間	環境防災科設置へのプラン立案 2000年4月～2002年3月 その後、修正しながら、3年間の授業を実施してきた。個々の授業ではco-teachingの担当者同士で打ち合わせ。打ち合わせ回数は授業ごとに違う。「震災メモリアル行事」では3ヶ月程度の準備日数が必要。委員会で5回程度打ち合わせ。
	立案時間	
	上記のうち打合せ回数	
プラン立案で注意を払った点工夫した点	【環境防災科の教科の授業】 環境防災というコンセプト、自然環境と社会環境と防災との関係、命の大切さ・助け合いのすばらしさといった教訓、共生社会での協働をどう各科目に落とし込んでいくか。教育目標を達成するために、どんなコンテンツを持った学校設定科目を作るか。学習指導要領の示す単位数にどうあてはめるか。 【総合学習】 できるだけ多数の教員に参加してもらうために、得意分野と防災のかかわりを授業してもらった。 【震災メモリアル行事】 震災体験の継承・発信を目指す。これまでに5回実施したが、後半3年は特に生徒の発表を重視した。	
プラン立案で苦労した点	前例がない学科であったため、すべてをゼロからスタートした。教職員による防災の学習と理解、外部講師などのネットワークづくり、校外学習や発表、課題研究といった授業連携の研究に時間と労力を割いた。 総合学習は普通科生徒を対象としており、興味の喚起に工夫が必要。 「震災メモリアル行事」は5回目で、マンネリ化しない工夫。	

Ⅲ実践にあたっての準備

準備に関わった方 と人数・役割	団体内のスタッフ総人数	環境防災科の授業は約10人が受け持っている。 総合学習は10人でローテーションを組んで受け持っている。 「震災メモリアル行事」は環境防災科が企画・立案し、校内委員会を経て全教職員が担当する。
	外部スタッフの総人数	多数。ただし、外部講師や行事の講師など、1回～数回の授業を受け持ってもらう形がほとんど。
	主なメンバーの 役職・役割	教員は企画、コーディネートと授業実施。外部講師は授業。
準備に要した日 数・時間	準備期間	個々の実践によって1時間～数時間と違う。電話やメールの依頼だけで済む授業もあれば、校外学習の内容によっては2週間以上をかけて事前学習をして当日の体験を迎えることもある。 「震災メモリアル行事」は約3ヶ月かけて作り上げた。
	準備総時間	
	上記の内打合せ回数	
教育関係への 働きかけ	働きかけた教育関係者・ 機関名	兵庫県教育委員会
	どのように働きかけたか	校外学習のバス代、外部講師の非常勤講師料などは教育委員会に申請する。
	結果	十分な配当があった。
地域への 働きかけ	働きかけた地域の人・ 機関名	多聞東防災福祉コミュニティ 多聞南防災福祉コミュニティ
	どのように働きかけたか	地域防災訓練に舞子高校生を参加させるための打ち合わせ。企画は地域から出ている。 舞子高校の行事「震災メモリアル行事」へのパネリストとしての参加、一般参加。
	結果	舞子高校、環境防災科、防災教育、防災に関わる若者への理解が深まった。
保護者・PTAへ の働きかけ	働きかけた保護者・ PTA組織名	舞子高校保護者会
	どのように働きかけたか	「震災メモリアル行事」への一般参加、炊き出し参加。 ネパールとの交流、ボランティア活動への資金援助。
	結果	舞子高校、環境防災科、防災教育、防災に関わる若者への理解が深まった。
機材・教材の 準備方法	用意した機材・教材	外部講師の授業と震災メモリアル行事はパワーポイントやビデオなど。小学生とのマップづくりなどでは地図や筆記用具。炊き出しでは大鍋、釜など。それぞれの行事によって準備機材、教材は異なる。
	入手先・入手方法	すべて学校にそろっている。震災メモリアル行事の炊き出しでは自衛隊の炊き出し車両も参加した。
	機材・教材選定の理由(なぜこの機材・教材を選んだのか)	機材・教材は防災教育の具体化に必要と思われるもの。
参加者の募集	募集方法	普段の授業では生徒が参加者であるため、募集は不要。 「震災メモリアル行事」は保護者会への文書配布、地域への呼びかけとポスター掲示、小学校、中学校への参加依頼など。
	募集期間	震災メモリアル行事は1ヶ月ほど前から当日まで。

	参加予想人数	授業は正規の生徒数。震災メモリアル行事は小学生、中学生、高校生、一般を含めて約1300人。
	実際の参加人数	同上。
	募集方法の成功点	震災メモリアル行事に限って言えば、教育委員会や舞子高校の授業に参加した人々の組織のネットワークを使った点。
	募集方法の失敗点	震災メモリアル行事に限って言えば、ポスターだけでは地域住民はなかなか集まらない。
準備で苦労した点・工夫した点		環境防災科設置に向けての準備は苦労だらけであった。関連機関に出向いての依頼と学習、大学教授を訪れての学習、専門書・関連書などの講読、防災関連会議、ワークショップなどへの参加とネットワークづくり。中学校への広報。 震災メモリアル行事は回を重ねるごとに工夫を凝らせるようになってきた。実施当初（1回目、2回目）あたりは、こちらの思い入れが空回りするくらい大変であった。

Ⅳ タイムスケジュール（プラン立案から実践終了までのスケジュールを記載して下さい。）

以下の質問には、例として「語り継ぐ」の作成で記入します。環境防災科の授業実践、総合学習の実践は3年間の活動を総括したものであり、各年度にさまざまなとりくみがあって、その内容も多岐にわたっているため、個々のケースを書いていくと莫大な量となるため割愛します。基本的には一つ一つの授業を実施するのに必要な時間をきちんと割いてきたということです。

	プラン立案	実践にあたっての準備	実践
2004 4月	1学期前半を使って震災体験の記録にとりくむことを4月当初に決めた。	教科「卒業研究」スタート 震災体験記を書き留めることの意義を説明。文章の書き方、引用の方法などを教える。	記憶の掘り起こし、聞き取りなどの作業と平行して文章作成。
5月			記憶の掘り起こし、聞き取りなどの作業と平行して文章作成。
6月			記憶の掘り起こし、聞き取りなどの作業と平行して文章作成。ファイルで提出。
7月 8月			校正 印刷依頼
9月			出版 関係各所に配布 以降、さまざまな取材に答える。
2005 1月			増刷【別途資金】

V実践の詳細 【A. 素材 】（例として、小学生との「安全マップづくり」と「震災体験」の授業を取り上げます）

時間	場所	活動内容	指導者 講師等	使用機材・ 教材等	留意点	子供たちの反応・声	苦労した点・工夫した点	スタッフの人数役割
地域安全マップづくり								
9：00	多聞東 小学校	説明	舞子高校教員	プリント	交通安全 写真を撮り過ぎない 危ないところだけでなく楽し いところも調べてくる		小学生にもわかりやすいプリント の作成	小学校教員 3 人、高校教員 3 人
9：10	まち あるき	小学生と高校生がグループになり、先生 といっしょに地域を歩いて調べる。	小学校教員 舞子高校教員	デジタルカメラ 筆記用具 メモ	交通安全 写真を撮り過ぎない 危ないところだけでなく楽し いところも調べてくる	楽しい 危ないところがあった	地域を区分けし、グループの担当範 囲を小さくして時間内に回りされ るようにした。	小学校教員 3 人、高校教員 3 人
10：30	写真印刷	デジタルカメラで撮った写真を印刷す る。	舞子高校教員	パソコン デジカメ プリンター	必要な写真を絞り込む	興味津々		小学校教員 3 人、高校教員 3 人
10：30	地図の色 塗り	グループに分かれて、写真印刷と平行し て、地図に建物の種類や公園等の色分け をしていく。	小学校教員 舞子高校教員	色鉛筆 地図	遊びにならないように	興味津々	地図はコピーのものを使ったので、 うまく張り合わせるのに苦労した。	小学校教員 3 人、高校教員 3 人
10：45	写真と解 説の貼り 付け	印刷しあがった写真を「のりしろ」部分 を少しにして、立てて貼り付け、その裏 に感想などを書き込む。	小学校教員 舞子高校教員	色鉛筆 のり はさみ 地図 メモ用 紙	コメントは短く、内容のある ものに。	おもしろい。案外知らないところに消火 栓があったりした。「子供 100 当番」 の家が多い。など。	不必要な情報は捨てる。何が必要か の判断が難しい。	小学校教員 3 人、高校教員 3 人
11：30	終了	片付けて小学校に寄稿。 なお、昼から小学校で独自に発表会を開 いた。	小学校教員					小学校教員 3 人、高校教員 3 人
震災体験と防災の大切さ								
13：15	集合	多聞東小学校の教室に集合。パソコンや スクリーンなどの発表準備をする。	小学校教員 舞子高校教員	パソコン スクリーン プロジェクタ ー 黒板				
13：25	授業開始	震災体験 当時小学校 1・2 年生だった高校生が 震災体験を話す。内容は生徒に任せてい た。被災直後の混乱や親のありがたさ、 避難所のつらさなど、生々しい話を新聞 や写真、パワーポイントで説明した。	環境防災科生 徒	パソコン スクリーン プロジェクタ ー 黒板	ポイントを整理して提示。 時間が長過ぎないように。	真剣。信じられないという感じ。	子供にわかるようにやさしい言葉 を使う。パワーポイントなども言葉 選びに注意。	小学校担任 環境防災科生徒
		地震のメカニズムと地震への備え 地震のメカニズムをパワーポイント を使って説明。	環境防災科生 徒	パソコン スクリーン プロジェクタ ー 黒板	ポイントを整理して提示。 時間が長過ぎないように。	質問が多数出た。	子供にわかるようにやさしい言葉 を使う。パワーポイントなども言葉 選びに注意。マグニチュードと震度 の違いをスピーカーで説明。	小学校担任 環境防災科生徒
14：30	終了							小学校担任 環境防災科生徒

V実践の詳細 【B. イベント 】（例として震災メモリアル行事を取り上げます。）

時間	場所	活動内容	指導者 講師等	使用機材・ 教材等	留意点	参加者の反応・声	苦労した点・工夫した点	スタッフ（団体内・外部）の人数・役割
9：00	体育館	集合 第1部 開始 黙祷	全教員		生徒による司会、運営			全教員 中心教員が運営
9：01		「しあわせ運べるように」を環境防災科 生徒全員で合唱。	関係教員	ピアノ	3部合唱で美しく。気持ちを 込めて。	美しいハーモニーであった。	放課後の練習。特に受験生である3 年生の集合。	担任 環境防災科教員 音楽教員
9：05		校長から震災の意味などについて話。	校長	マイク				全教員が参加しているが、運営は担当教 員
9：20		新潟県立小千谷高校、新潟県立長岡大 手高校の代表生徒からのアピール	両校生徒代表	マイク		真剣なアピールに聞き入っていた。		全教員 中心教員が運営
9：40		第1部終了 舞子高校3年生退場 多聞東中学校1年生入場						学年教員 中学校教員
10：00		第2部 記念講演	室崎益輝氏	パソコン プロジェクター マイク		真剣そのものであった。		全教員 中心教員が運営
11：00		記念講演終了 休憩 移動						全教員 中心教員が運営
11：20	体育館 教室	分科会 開始 各教室に分かれて10の分科会を聞く。				多種多様。メモリアル行事の冊子として 残す。	生徒による視界、運営、記録	全教員 中心教員が運営
12：10	グラウンド	終了 炊き出し交流 なお、準備は早朝から	担当教員 担当生徒 保護者 自衛隊	なべ、釜、薪、自衛隊炊き出し車両、机、 おわん、割り箸	衛生	楽しそう。10年前に思いをめぐらせる 一般参加者も。	生徒、教員、保護者、自衛隊の連携 【災害時の想定訓練】	全部で50人程度
13：00	教室	LHRで感想文						担任教員

【参考】全体会・分科会 講師 使用機器 一覧				
会	講 師	所属・役職	場所	備 考
全 体	室崎益輝	独立行政法人消防研究所	体育館	パワーポイント式
	杉山明男	神戸大学名誉教授	体育館	OHP
	村井雅清	被災地 NGO 協働センター	講義室	パワーポイント式
	岡田幸宏	神戸市消防局須磨消防署	化学2	未定
	石橋高治	自衛隊兵庫地方連絡部	会議室	プロジェクター ビデオ スクリーン
	宝田耕三	神戸大学学生震災救援隊 OB	地学	
	放送委員会生徒	須磨友が丘高校放送委員会	社会科教室	パワーポイント式 ビデオ MD デッキ
	環境防災科生徒	舞子高校	情報	パワーポイント式
	環境防災科生徒	舞子高校	環境防災情報	パワーポイント式
	環境防災科生徒	舞子高校	生物1	パワーポイント式
	環境防災科生徒	舞子高校	生物2	パワーポイント式

V実践の詳細 【C. 総合的な学習の時間】（学習の準備段階から授業時間（コマ）毎に記載して下さい。）

コマ	日時	場所	学習内容	教師の支援・指導の留意点	児童・生徒の学習活動	評価の観点	使用機材・教材	苦勞した点・工夫した点

これについては表を埋めるような記入ができません。内容は以下のとおりです。

2004年度、総合的な学習の時間を使って、2年生を対象にして、週に1時間、防災教育を通年で展開した。テーマは以下のとおり。

- ・ インターネットを使って防災のさまざまな課題を調べる
- ・ 「語り継ぎたい命の尊さ」【一ツ橋出版 住田功一】を使って「命」を考える
- ・ 阪神・淡路大震災をクイズ形式で総括
- ・ 藍染実習と吉野川の防災の知恵・絵本作り
- ・ 世界の災害を英語で読む
- ・ 歌を通してコミュニケーションの大切さを学び、ボディ・パーカッションで表現
- ・ 阪神・淡路大震災を素材にディスカッションやワークショップ
- ・ 自然や防災、命や仲間をテーマにした童話を読む
- ・ 六甲山の立体地図をつくる

なお、上記の4コマの授業とは別に、学期に1回、防災のフレームを示す授業を行った。内容は災害の定義、自然環境・社会環境と災害の関係、ボランティア、まちづくり、途上国の知恵、防災とは何か、なぜ防災か、いつ防災か、など。4コマのさまざまな学習が防災というフレームにうまく入り、生徒の興味を持っているテーマが防災とつながっていることを示した。

目的	➤ 防災力を持った市民を育成する。 ➤ 防災教育を通して教科の学習意義を再確認する。 ➤ 多くの教員が参加することで防災教育に広がりを持たせる。
方法	➤ 実施クラス数+αの教員が、自分の得意な防災の話を用意する。分野は大別すれば自然環境と社会環境、細かく分ければ「地震のメカニズム」「災害と文学」「国際貢献」「非常食」「ボランティア」「命」などさまざま。 ➤ それらの教員が一人4時間を持ち時間として、各クラスをローテーションで回る。 ➤ 生徒から見れば、年間で6人〜7人の先生が自分の得意な防災の話をしてくれることになる。 ➤ 防災の骨格となる話については環境防災科の教員が全体を対象に講演する。
時間	➤ 週に1時間を時間割の中に配当する。 ➤ 一つのトピックについて4時間を持ち時間する。 ➤ 全体への講演は年に3回とする。
成果	➤ 教員にとって、自分の得意分野から防災にアプローチすることになり、取り組みやすく、広がりを期待できる。 ➤ 生徒にとってさまざまな分野の防災を聞くことができ、社会環境と防災、自然環境と防災について知識を深めることができる。

VI 実践後

参加者へのアンケート結果	震災メモリアル行事など外部の参加者にかかれていた行事ではアンケートは実施していない。授業で行った活動は、個々の生徒の感想を聞いたりしているが、正式なアンケートとして残しているわけではない。ただ、授業の活動の中で生徒の印象に残っているものは、「長田のまち歩き」「D I G」「国連防災世界会議に向けた英文メッセージづくり」「課題別・グループ別調べ学習」「台風23号による水害、新潟中越地震の学習とボランティア活動」「ネパールとの交流のためのカルチャーボックスづくり」などである。	
成果として得たこと	活動、体験が生徒の防災への意欲を高めている。その意欲が外部での発表やボランティア活動につながり、その姿を見た外部からの好意的な評価につながるという好循環を生み出している。2年間の準備期間を入れると合計5年間の活動となるが、その間、防災に関わる人々とのネットワークができてきた。行政（消防なども含む）、大学や研究機関の研究者、大学生、NGO、NPO、企業、マスコミ、小中高校など多様な人々と国内外でつながってきた。防災教育を学校に持ち込み、学校から外へ飛び出して活動するために、また、防災意識を高め、次に起こる災害に備える意識と実践を高めるために、このネットワークは大いに活用できる。	
成果物	震災記録集「語り継ぐ」 舞子高校防災教育実践事例集「阪神・淡路大震災の体験を生かした新たな防災教育の展開」 舞子工 HP 記録集「震災メモリアル行事 阪神・淡路大震災を忘れない」【別途、学校予算】	
広報方法	広報した先	行事への広報は教育委員会や学校。日ごろの授業の取材も含めてマスコミからの取材が多いが、これは広報をしたわけではなく、先方から取材依頼があったもの。 2冊の冊子作成後の広報については、「語り継ぐ」は過去舞子高校を取材したすべてのマスコミ、外部講師として授業をしてくださった個人・団体、教育関係者に郵送、「阪神・淡路大震災の体験を生かした新たな防災教育の展開」は県内の防災教育を進めようとしている学校や舞子高校へ学校訪問に訪れた学校に配布予定。 震災メモリアル行事の広報先は教育関係者。 以上への取材もすべて先方からの依頼で、こちらから積極的に広報したわけではない。
	広報の方法	マスコミへの後方は一切なし。向こうから取材にくる。 震災メモリアル行事の広報は教育事務所と近隣中学校への郵送。
	取材にきたマスコミ	NHK 読売テレビ サンテレビ 静岡テレビ テレビ新潟 渡海テレビ など 神戸新聞 朝日新聞 毎日新聞 読売新聞 共同通信 時事通信 など その他ミニコミ誌 専門誌 雑誌
	広報された内容（掲載された記事・番組等）	多数
	成功点	環境防災科への理解と期待が拡大。生徒に自信がついた。
	失敗点	取材する側の理論で振り回されるときがある。
全体の感想と反省・課題	防災教育の体系化にとりくもうとしたが、非常に難しいというのが実感。まだまだパッチワークの感がぬぐえない。ただ、自然環境と防災、社会環境と防災というくくりが一つのフレームとなっているので、「寄せ集め」感はない。 HP を見て、多くの学校から問い合わせや学校訪問があった。防災教育のパイロット的役割が果たせてきているのではないかと。 防災教育にかかわる学校・教員のネットワークと、防災にかかわる専門家、行政、国際機関、市民団体、企業などとのネットワークが格段に広がった。このネットワークを生かし、防災教育を全国に広め、あわせて舞子高校をより開かれたものにしたい。	

今後の予定	来年度以降の進め方	3年間のとりくみを総括し、取捨選択しながらよりよいものを作っていく。
	是非実施してみたい 取り組み	現在のとりくみの中では「長田のまち歩き」「小学生との防災学習」「消防学校体験入校」「国際機関に学ぶ国際支援」は続けたい。外国との交流をもっと広げてみたい。特に途上国の防災の知恵を学びたい【現在はネパールと行っている】。ボランティアや下記集中講座などを設け、単位認定できるようにしたい。 大学生、高校生といった若い世代のネットワークを充実させ、わかもの防災サミットを開催したい。